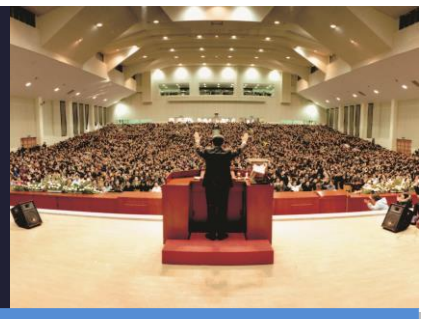
第 2018-16 号

恵みと真理のニュース



2018 年 4 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］

恨みと不平の話の代わりに感謝の話をしたら神様が神癒の恵みを与えてくださいました

私は結婚してソウルで姑を仕えて生きながら偶像崇拝をする生活をしました。 特別な日に姑をついてお寺に行って熱心に供養しました。そのように何年間過ごしながら旦那の健康が悪くなってデジョンに引越ししました。デジョンに行っても子供の時からよく遠足に行ったお寺を思い出してその寺に通いました。十年が超えるほどお寺に通い福を願いましたが経済状況はなかなかよくならなかったです。むしろ、家庭がもっと難しい問題が出来て１９８７年に私は子供をつれてアンヤンに引っ越しました。大変に職場生活をしながら帰宅途中、バースから降りて疲れた体で家に歩いてい行っている時、ふと教会の十字架が目に入りました。幼いごろ友達をついて教会に行って声高く賛美を歌ったのが思い出して教会に行きたくなりました。今まで、偶像崇拝をして生きてきたので私の心で“私のような人も教会に通いイエス様を信じる生活が出来ますか？”と神様にお尋ねました。そして、何日が過ぎなくて朝空けの時間に、自らその教会に行って祈っていました。私が一人で教会に通ったのをどうわかったか、隣家の新妻が“私と一緒に教会に通いましょう。と私を伝道しました。主日に恵みと真理教会に行って決信をしてイエス様を信じ仕える信仰生活をはじめました。はじめは教会の礼拝と集いに全てついて行きました。区域祈り会がどんな祈り会なのかも知らなくて一番早く行くほど神様に礼拝を捧げて祈るのが好きでした。教区聖徒達が集まって捧げる聖霊充満祈り会に参席して、涙と鼻水を流して祈りました。私だけいげんの祈りが出来ないようで神様にいげんの賜物を求め祈りました。“神様！私はお金もなくて、良い背景もないです。しかし、今は全能なる神様を信じ委ねます。”と祈る時、神様が慰めてくださり、父なる神様が私を抱いてくださるのを感じました。そのように熱心に祈ると神様が聖霊に満たしてくださり、さまざまな苦難をよく勝つように助けてくださいました。父なる神様が共におられるので心が強くなり、世の中でうらやましいことがなかったです。
嫁が運営する事業場に法的な問題があって息子の夫婦が長い間、苦しんでいて大変でした。しかし、息子と嫁は挫折しなく神様を仰ぎました。難関にぶつかるたびに“神様は私たちの味方である。”と確信を持って神様に祈りました。教区長と区域長達、区域聖徒達も自分の事のように関心を持って祈ってくださいました。すると、知恵を与えてくださり、神様の恵みが望んで、その問題が良く解決して苦難から解決されました。私が神様の子供として生きながら切に悟ったのは神様と神様の約束の御言葉を強く信じ、礼拝と主の事に力を尽くすと父なる神様が私たちの子供を守ってくださるのです。子供は私のものではなく神様がしばらく預けてくださった大事なプレゼントであるのをさまざまな経験を通して知るようになりました。
私は何年前から膵臓の両端に二つのこぶがあって定期的に検査を受けて来ました。ところが、ある日、医師から大きい病院にいって検査を受けなさいとしました。その病院でももっと大きい病院に行ってみなさいとしました。医師から推薦されシュンチョンヒャン大学病院に行きました。４年をその病院に通いながら１年に一回づつ追跡検査を受けます。どころが、享年５月でした。普通のように病院に行って検査を受けた後、教授が私を呼びました。急に状態が悪くなったのではないかと、もしかして、悪いこぶではないのかと心配しました。診療室に入っていたら、医師が私と机の上の書類を交代に見ながらかしげて頭を左右に振りました。
本当に状態が悪いのかと思って“先生！なぜですか。”と聞くと、すると医師は“こぶが無くなりました。おかしいですね。！”もうこれから検査受けに来なくても良いです。”と言われました。その場で“ハレルヤ！”叫びました。神様が治療してくださいました。今週、主日礼拝で当会長牧師が“健康と治癒のためこのように話しましょう。”という題目で説教しながら神様の恵みを受ける話、神様の権能が表れる話す方法を教えてくださいました。信仰と希望の話が習慣になるようにして、神様に向かって感謝する話だけしなさいとお話しました。私はその御言葉に従順するように頑張りました。一日に二百回、２１日の期間を決めて“神様感謝します。”としました。そうしたら、神様がストレスを解消してくださり、免疫細胞を活性化してくださり、神癒しの恵みを与えてくださいました。神様の恵みに感謝捧げます。私はいくら小さい事にも感謝する言葉が自然に出るようになりました。そして、とても大変で苦しい事が出来たら字で書いて神様に手紙を書く習慣が出来ました。神様と対話したい時、どんな言葉でどのように祈りをするか出来ない時、神様に手紙を書いてその手紙を読みながら祈っります。礼拝中心の生活をして主の事に力を尽くすと世の中で畏れる事がないし、喜びが溢れて、少し世の事に力を尽くすとすぐ心がむなしくなり肉体が疲れるようになります。今の私の状態がそのようなことを感じ神様の慰めと許しを求めて新たな心と覚悟で信仰生活をしようと念を押して証を書いています。いつも初恋の純粋と熱情で主を愛し、仕えるのを願います。主の前に立つまで相変わらず主を愛して多くの魂を主に導く人生を生き助けてくださるように神様に祈ります。

［信仰コラム］

新たな生命そして豊かな生命

"...わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。"（ヨハネによる福音書 10:10）

新約聖書の福音書ではイエス様がなさったしるしと奇跡が多く記録されています。欠乏した状態が豊かな状態に変化された事件があります。その中で二つの事件を調べてみましょう。まず、水がぶどう酒になった事件を調べてみます。
その事件記録をみると日と場所を具体的に明示することで時間と空間の中で発生した歴史的な事件だということを証明しています。婚姻宴の家には連日お客で込み合い、披露宴の終りに至ってぶどう酒が底についてしまいました。これを最初に知ったマリアはイエス様が婚姻宴の苦境を解決できるということを信じてイエス様に助けを求めました。下人達が理由不問してイエス様の要請通りに六つの石の壷に水を満たして、酌んで宴会長に持っていたら驚くべきなことが起りました。宴会長に伝達される瞬間、とても質の高いぶどう酒になっていました。宴会の雰囲気が更に高調されました。カナの婚姻宴の家でイエス様を招請したので欠乏した状態が豊かな状態になる奇跡を経験するようになりました。
この奇跡事件が与えるメッセージの中で漏らされないことがあります。水がぶどう酒になる質的な変化です。イエス様は私達人生の魂と生活、肉体に質的な変化が起るようにしてくださいます。魂が生まれ変わります。義人になり、聖徒になり、神様の子になり天国市民になります。この地で主に仕えて行う全ての事事が永遠な意味を持つようになります。復活して変化した体を持ちます。
次は、大麦のパン五つと魚二匹で数多くの群衆が十分に食べた事件を調べてみます。
イエス様が休息を取るために弟子達と一緒に閑寂な所を探して野に到着しました。しかし、そこに多くの人々が先に来ていました。イエス様が群れを見られ、まるで牧者のない羊ようであることにより哀れみ、彼らに神様の国のことを教えられてその中にいる病人を癒されました。日が暮れるとイエス様がピリポに"どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか"と質問なさいました。ピリポが"二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りますまい"と答えました。イエス様が弟子達に"パンがいくつあるのか？"と言われました。しばらくしてアンデレが"ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう"としました。イエス様はアンデレに"それを私に持ってきなさい"と言われ、人々を 100 人あるいは 50 人ずつ集まって座るように弟子達に指示なさいました。群れが食べるパンがないのにイエス様は弟子達にパンを食べるための準備から指示なさいました。イエス様が大麦五つと魚二匹を持って感謝祈祷をなさった後、パンを取って弟子達にあげながら群れに配らせて、魚もそのようになさいました。すると驚くべきに群れが十分に食べて、弟子達が残ったのを集めると 12 のかごにいっぱいになりました。
この二つの事件は全て欠乏を豊かに変化させた事件です。しかし、差異点はカナの婚姻宴の家で行われた奇跡は質的な変化があって、野原で行われた奇跡は量的な変化がありました。この二つの対照的な事件は全てのキリスト人が経験する変化を克明に表しています。イエス様が"盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。"と言われました。イエスキリストを信じると宗教人になるのではなく、新たな命を得るのです。新たな命は豊かな命です。永遠に天国で生きる命です。これは私達の魂に起きた質的な変化と量的な変化です。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

一貫して迷ってしなくて正体表明

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

人は正体性を明確してしっかりと持ったなければなりません。聖書には、人が自分の正体を忘却して行動した事と人が当然に持つべきの正体についていろいろの形で記録されています。アダムとエバは、サタンの誘いに陥って自分の正体を忘却した行動をしました。サタンが狡猾の蛇を通してエバに近寄って来て、神が禁じられた善悪を知る木の実を食べるように誘惑しました。禁断の木の実を食べると死ぬ可能性があるとエバの答えに対して蛇は言うのを**「へびは女に 言った， あなたがたは 決して 死ぬことはないでしょう それを 食べると， あなたがたの 目が 開け，神のように 善悪を知る者となることを，神は 知っておられるのです 」**としました

アダムとエバは、自分の正体を忘却していました。自分は神が造られた存在であり、被造物は、創造主になることができないという事実を忘却したものです。蛇の話を聞いて、彼らの心に貪欲が生じたからです。その日の以来、アダムの子孫は正体性を忘却し、神に逆らってかたくななで神に敵対する行為まですることになりました。それゆえ、大洪水で審判を与えられました。しかし、神は、罪のあがないの道を開いてくださいました。将来に来られる救世主について明らかにしました。アダム、アベル、セット、エノス、エノク、ノアにつながる少数の人々だけが将来に来られる救い主を信じ、自分の正体を正しく認識して、神を敬い恐れています。神はアブラハムを選んで、あがないの真理と一緒に自分の正体を知ることになりました

そして、アブラハム、イサク、ヤコブを通して民族を形成するようにし、モーセと預言者たちを通して律法と預言者をいただき、神を敬い恐れるようになりました。しかし、残念ながら、イスラエルの子孫たちは、ひんぱんに正体性を忘却して偶像を仕えるので、神から罰を受けて深刻な試練を経験しました。イスラエルの歴史は正体性の忘却と回復の歴史です。その中でヨシュアの時代とエリヤの時代にあった事件を見てみましょう

第一に、聖徒たちは、自分の正体に合致するよう生きて一貫性を持ったなければなりません。

イスラエルの偉大な指導者ヨシュアは民に、この一貫性を強調して促しました。 ヨシュアが年齢多くて年老いてこの世を去る時が近い来たのを感じて別れの説教をしました。ヨシュアは、アブラハムが神の召しを受けたことから始まり、今に至るまで、イスラエルを守り、導きくださった神様の救いの歴史を振り返えました。次にこのように言いました。**「 それゆえ， いま，あなたがたは 主を 恐れ， まことと， まごころと， 眞實とをもって， 主に 仕え， あなたがたの 先祖が， 川の 向こう， および エジプト で 仕えた 他の 神を 除き 去って，主に 仕えなさい． もしあなたがたが 主に 仕えることを， こころよしとしないのならば，あなたがたの 先祖が， 川の 向こうで 仕えた 神でも， または， いまあなたがたの 住む 地の アモリ びとの 神でも， あなたがたの 仕える 者を， きょう， 選びなさい． ただし， わたしとわたしの 家とは 共に 主に 仕えます 」**

民が答えを「私たちが主たけの神に仕え、神に従いたします。」としました。

「 ヨシュア はこれらの 言葉を 神の 律法の書にしるし， 大きな 石を 取って， その 所で， 主の 聖所にあるかしの 木の 下にそれを 立て， ヨシュア は， すべての 民に 言った， 「見よ， この 石はわれわれのあかしとなるであろう．主がわれわれに 語られたすべての 言葉を， 聞いたからである． それゆえ， あなたがたが 自分の 神を 捨てることのないために， この 石が， あなたがたのあかしとなるであろう 」そして、石もこの言葉を聞いたのに、ましてや人が言葉を聞くことがないよう、神を裏切ることがあってはならないと念を押しました。しかし、イスラエルの民は、カナンの地に定着して生活環境が良くなり、カナン人が仕える宗教に興味を持ち始めました。宗教和合という名分の下に似合う開始しました。先住民、先住民の文化なんて文化財という言葉に包装し近寄って来ました。そして偶像崇拝に陥って混合宗教人たちになっていきました。ヨシュアは民に「皆さんよ、主のみ仕え」と叫ぶ一方、「わたしとわたしの家は主さえに仕えます」と自分の確固たる決意を表明しました。ヨシュアは 110 歳を生きました。彼は生きている間少しも動揺することなく、主なる神のみ仕えました。

第二に、聖徒たちは 迷ってしなくて自分の正体を確実に表明しなければなりません

王妃イゼベルによって、アハブ王もバアル神の崇拝者となり、イスラエルの全域にバアル神崇拝が蔓延しました。神は預言者エリヤに指示して、神の罰として露や雨が全く降らないのをアハブ王の前で宣言しました。その後、3 年 6 ヶ月の歳月が過ぎたある日、神様がエリヤに言われた。 「行って、アハブに会いなさい。私の土地の上に雨を降ろすだろう」

エリヤはアハブ王に会って求めました。 「バアルの預言者 450 人とアシラの預言者四百人をカルメル山に集めて、私に送ってください。」アハブ王は干ばつと飢饉の被害が深刻な状況であるため、エリヤの求めに応えています。王とバアルの預言者たちと民が集まるとエリヤが民に叫びました。

「エホバの預言者は、**「わたしはただひとり残った 主の 預言者です． しかし バアル の 預言者は 四百五十人あります。 われわれに 二頭の 牛をください． そして 一頭の 牛を 彼らに 選ばせ， それを 切り 裂いて， たきぎの 上に 載せ， それに 火をつけずにおかせなさい． わたしも 一頭の 牛を 整え， それをたきぎの 上に 載せて 火をつけずにおきましょう． こうしてあなたがたはあなたがたの 神の 名を 呼びなさい． わたしは 主の 名を 呼びましょう． そして 火をもって 答える 神を 神としましょう 」． 民は 皆答えて「それがよかろう 」と 言った． そこで エリヤ は バアル の 預言者たちに 言った，「あなたがたは 大ぜいだから 初めに 一頭の 牛を 選んで， それを 整え， あなたがたの 神の 名を 呼びなさい．ただし 火をつけてはなりません 彼らは 與えられた 牛を 取って 整え， 朝から 昼まで バアル の 名を 呼んで「バアル よ， 答えてください 」と 言った．しかしなんの 聲もなく， また 答える 者もなかったので， 彼らは 自分たちの 造った 祭壇のまわりに 踊った「バアルよ、我々に応答してください。」と呼ばれていました。午後まで答えがありませんでした。いよいよエリヤの番になりました。エリヤは、イスラエルの十二部族の數に沿って十二の石を取り、その石段を積みました。 その 石で 主の 名によって 祭壇を 築き， 祭壇の 周圍に 種二 セヤ を いれるほどの 大きさの， みぞを 作った． また， たきぎを のべ， 牛を 切り 裂いてたきぎの 上に 載せて 言った， 四つのかめに 水を 滿たし 水は 祭壇の 周圍に 流れた． またみぞにも 水を 滿たした** 水がいっぱいになりました。

エリヤが前に出て来て叫びました。**「 主よ， わたしに 答えてください， わたしに 答えてください． 主よ， この 民にあなたが 神であること， またあなたが 彼らの 心を 翻されたのであることを 知らせてください そのとき 主の 火が 下って 祭壇と， たきぎと， 石と， ちりとを 燒きつくし， またみぞの 水をなめつくした。」民は 皆見て， ひれ 伏して 言った， 「主が 神である． 主が 神である 」．エリヤ は 彼らに 言った， 「バアル の 預言者を 捕えよ． そのひとりも 逃がしてはならない 」． そこで 彼らを 捕えたので， エリヤ は 彼らを キション 川に 連れくだって， そこで 彼らを 殺した** その後、エリヤはアハブ王に「もう上がって食べ飲みでください。私の耳に大雨の音が聞こえます。」としました。少し後に雲と風が起きて空が真っ暗でついに大きな雨が降り出しました

この事件では、神霊な教訓がたくさんあります。その中でエリヤが民に選民の正体を明らかに現すように促す言葉に関して集中して見てみましょう。

エリヤが民に叫びのを**「あなたがたは いつまで 二つのものの 間に 迷っているのですか． 主が 神ならばそれに 従いなさい． しかし バアル が 神ならば， それに 従いなさい 」**としました。民は何も答えませんでした。民が黙った理由は、彼らがアハブ王とイゼベルの顔色をうかがいながら、肉体的な実利を追求していたからです。彼らはバアル神も仕え、エホバの神も仕えました。彼らは宗教多元主義の、宗教的混合主義を選択していました。エリヤは民に、これらの二重的で中立的な信仰態度を捨てるように促しました。イスラエルの民は山当でも、主の名前を呼んで供物を差し上げて信じていました。しかし、その信仰は、神のみ言葉に反しされるので、無駄な信仰でした。聖書はそのように言われていません。結局、イスラエルとユダの国は滅亡しました

アハブ王とイゼベルの統治下で四種類の人々がいました。信仰の節概を捨てた預言者がいました。宮内大臣オバデヤが隠れて世話にした 100 人の預言者たちは、信仰の節概を守ったが、息を殺し隠れていました。民は両側に足をかけて王とエリヤの顔色をうかがい、場合によっては違って行動し決断を促してもためらっていました。そのような状況では、エリヤは、自分の正体を明らかに表わして闘争しました。王とイスラエルの民が悔い改めて正しい道に転じようとするために、危険を覚悟して大胆に出ました。このような人によって、最終的に干ばつと飢饉が終わっており、イスラエルの民が神に戻ってきました。

皆さんは聖徒として正体を忘却しないだけでなく、 一貫して 聖徒の正体に適合する行動をし、どんな場合でも迷ってしなくて、自分の正体を確実に表明するのをヨシュアのように、エリヤのようにしてをください。